

イノシシの逆襲

～勢力拡大の舞台裏～



イノブタ

H20.5.4 栃木市で撮影

「昔はイノシシはいなかったんですよ。10年くらい前から増えてきてねえ。稲とかみんな食われちゃうんですよ。」旧田沼町**野上在住のK教諭**の怒りは収まらない。

現在、両毛地域の里山では、イノシシの被害が急増中なのだ。「実はね、あれはイノシシじゃなくて、**イノブタ**なんですよ。」K教諭によると、もともと栃木県の両毛地域にはイノシシは生息していなかったのだ。

1967年、和歌山県畜産試験所で、イノシシとブタを交配させたイノブタが初めて誕生した。見た目はイノシシに近いが、その肉が人気を博し、全国にイノブタの養殖場が作られた。

ところが、平成初期、群馬県境村付近の養殖場からイノブタが逃げだし、足利市、旧田沼町付近を起点に爆発的に生息域を広げていったのだ。現在では、宇都宮市まで拡大しており、栃木県で公表し

ている資料によると「**両毛個体群**(仮称)」の数は23000頭から31000頭と推定されている。

ところで、**ブタはイノシシが家畜化されたもの**である。肉を多量に生産するよう育種改良された結果、約100の品種が世界各国で飼われている。イヌがオオカミから家畜化され、ペットとして様々な品種に改良されたのとよく似ている。繁殖力も強くなり、イノシシの一腹の産子数が平均5頭であるのに対し、ブタでは11頭と倍増している。イノシシとブタでは形態的にも生理的にも変化しているが、実は、これらは**同種**(学名Sus scrofa)なのである。そのため、交配が可能だ。イノブタを生産するには、普通、メスのブタの発情期にオスのイノシシを交配する。誕生するイノブタは、外見적으로는父親譲りの牙を持つイノシシであるが、産子数は母親の譲りの繁殖力を有するのだ。人間の手によって家畜化されたイノシシが、野生のイノシシと交配することにより、繁殖力絶大のイノブタとして、再び、野に放たれてたのである。

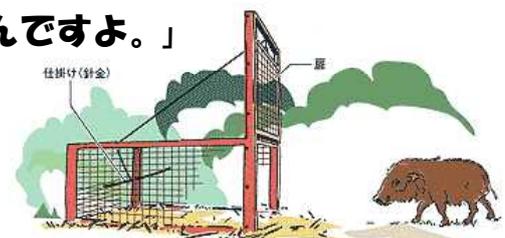
現在、栃木県は、「両毛個体群」をイノブタとみなし、消滅を視野に入れた捕獲を強化しているというが、イノブタの繁殖特性、(これまでイノシシが生息していなかったことによる)無防備に近い地域の現状、狩猟者の減少、高齢化などから判断し、イノブタの**勢力拡大を阻止することは困難**であり、次の事態が生じると予想している。→『都市部を除き県土のほとんどがイノシシ(イノブタ)の生息地となり、対応策のとりようのない甚大な被害が恒常的に発生する。』(「栃木県イノシシ保護管理計画」より) 事は重大なのである。



<イノシシよけの電気柵>

「あいつらは利口だから、ワナにかかれないんですよ。」

K教諭の声には諦めの表情が漂う。話を聞くうちに、県内の里山では、今、大変な事態が進行していることがだんだんわかってきた。もともと、イノシシと人間との関わりは深い。しかし、イノブタの問題に関しては、その関係性だけでなく、ブラックバスやアライグマなど外来種の与える影響と同様な側面があるように感じた。



<イノシシ用の箱わな(中国新聞HPより)>